

学生ウインドサーファーの参加動機 および活動継続要因が競技成績に及ぼす影響

平野貴也・柳 敏晴

The influences of participation motivations and continuation of the activity on competitive levels among Japanese university student windsurfers

Takaya Hirano and Toshiharu Yanagi

要 旨

本研究の目的は、学生ウインドサーファーの特性を知り、参加動機および活動継続要因が競技成績（レース順位）に及ぼす影響について明らかにすることである。「2005全日本学生ボードセーリング選手権大会」に出場した選手にアンケート調査を実施した結果、118件のデータが得られた。ウインドサーフィンをはじめたきっかけは大学での課外活動が多かった。ウインドサーフィンへの参加動機を構成していると思われる8因子を抽出し、“流行”“効果”“余暇”“フィールド”“外見”“活動・競争”“挑戦”“他者”と命名した。参加動機に、重要な他者の影響はあまり見られず、競技成績との検討では“効果”と“フィールド”因子に有意な差が見られ、下位群が高い値を示した。参加継続要因は競技成績に何らかの影響を及ぼしていると考えられた。

キーワード：ウインドサーファー、参加動機、継続要因

Abstract

The purpose of this study was to examine the influences of motivations and continuation on Japanese university student windsurfers who officially participate in competitive windsurfing meetings. The data for the research were collected from a total of 118 windsurfers (male, n=89, female, n=29) who participated in National University Student Boardsailing Meeting held in Okinawa, Japan, in November 2005. Factor analysis and ANOVA were applied to the data. The main findings were as follows.

- 1) 97.5% of the participants started windsurfing when joining a windsurfing team for their university.
- 2) Eight main motivations to start windsurfing were identified and named: “sports fashion,” “sports effects,” “leisure activities,” “sports fields,” “appearances,” “activities and competitiveness,” “challenges,” and “others”.
- 3) It was found that the scores of two factors (“sports effects” and “sports fields”) in the low rank group were significantly higher than those in either of two other groups.
- 4) Their competitive levels were influenced by factors to stimulate them to continue windsurfing.

Key words : university windsurfers, motivations for participation, stimulations of continuation.

はじめに

ウインドサーフィン²⁾はセールを全方位に傾けることができ、立位のまま操作を行うため、大きな身体運動が可能でありレースだけでなく多種多様な種目へと発展した。スピードとターン技術を競う「スラローム」、波を利用して演技を行う「ウエイブパフォーマンス」、平水面で技の難易度を競う「フリースタイル」、レースにジャンプや技を取り入れた「スーパーX」、最高速度を競う「スピードトライアル」などの競技が一般的である。中でも海上に定められたコースを順番にまわって着順を競う「コースレーシング」はオリンピック、アジア大会、国民体育大会などにサーリング競技の1種目として採用されている。

競技スポーツにおいて高いパフォーマンスを発揮するためには長期間にわたる専門的なトレーニングが不可欠であり、「見つけ、育て、生かす」ことの重要性が近年、提唱されている。国内でも日本オリンピック委員会のジュニア育成への取り組み、日本サッカー協会のJFAアカデミー福島、日本バレーボール協会のナショナルトレーニングセンターを拠点とする育成プログラム、福岡県タレント発掘事業など様々な団体が才能ある若手選手を強化するプログラムが進行中である。ウインドサーフィンの場合、日本ウインドサーフィン連盟、日本プロウインドサーフィン選手会、風波アソシエーションなどがキッ

ズやジュニア世代の育成に力を注いでいる。サーリング種目全般についてあてはまることであるが、現時点では他の種目と比較して競技開始年齢が遅く、大学のサークル活動として開始するケースが多い種目である。大学生のウインドサーフィン活動を統括する団体として日本学生ボードサーリング連盟(JUBF)がある。1978年発足以来活動を続けており、1980年代後半からウインドサーフィン愛好者が急増したこともあり、1993年から1995年には70校以上の加盟校、1000名以上の加盟者があった。その後、増減を繰り返し、現在の加盟は28校、約550名にとどまっている。主な活動はコースレーシングにおけるウインドサーフィン技術の向上、学生による大会の企画運営等である。アトランタ、シドニー、アテネオリンピックで使用されたミストラルクラスを艇種とし、年間4回の全国大会を実施している。

Gill and Huddleston (1983) は、参加動機について因子分析を用いて類型化することにより明らかにしている。そこではそれまで認識されていた「体力」「技術の向上」「挑戦」「興奮」などに加え「楽しさ」が主要な参加動機となることを指摘している。また Wankel and Kreisel (1985) は「楽しさ」を規定する要因に着目し、「技術の向上」「興奮」「競争」などの内発的な要因が「楽しさ」の重要な要因になるとしている。つまり「技術の向上」「競争」の結果である競技力や競技成績との関連を示唆している。一方、スポーツへの社会化研究で

表1. 属性

項目	上位群		中位群		下位群		全体	
	N=39	(%)	N=39	(%)	N=40	(%)	N=118	(%)
性別								
男性	31	(79.49)	29	(74.36)	29	(72.5)	89	(75.42)
女性	8	(20.51)	10	(25.64)	11	(27.5)	29	(24.58)
学年								
2年生	5	(12.82)	15	(38.46)	16	(40.)	36	(30.51)
3年生	12	(30.77)	18	(46.15)	20	(50.)	50	(42.37)
4年生	22	(56.41)	6	(15.38)	4	(10.)	32	(27.12)
								**
ゲレンデ								
関東	16	(41.03)	18	(46.15)	19	(47.5)	53	(44.92)
中部	1	(2.56)	1	(2.56)	2	(5.)	4	(3.39)
関西	15	(38.46)	17	(43.59)	4	(10.)	36	(30.51)
九州・沖縄	7	(17.95)	3	(7.69)	15	(37.5)	25	(21.19)
								**
交通手段								
自家用車	19	(48.72)	14	(35.9)	17	(42.5)	50	(42.37)
他者用車	0	(.)	1	(2.56)	2	(5.)	3	(2.54)
電車	10	(25.64)	15	(38.46)	13	(32.5)	38	(32.2)
バイク・自転車	10	(25.64)	9	(23.08)	8	(20.)	27	(22.88)
所要時間								
30分以内	18	(46.15)	12	(30.77)	16	(40.)	46	(38.98)
1時間以内	6	(15.38)	12	(30.77)	7	(17.5)	25	(21.19)
1時間半以内	11	(28.21)	7	(17.95)	13	(32.5)	31	(26.27)
2時間以内	4	(10.26)	5	(12.82)	3	(7.5)	12	(10.17)
2時間以上	0	(.)	3	(7.69)	1	(2.5)	4	(3.39)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
年齢	21.31	(.89)	20.67	(.96)	20.85	(1.41)	20.94	(1.13)

** P<0.01

は国内外問わず、多くの者が重要な他者について分析を行っており、親や家族、友人、指導者などの影響を明らかにしている。研究対象の違いによって最も影響する人物が異なるという結果が報告されており、各スポーツ種目特有のものがあると考えられる。また平松ら(1996)は大学生の達成動機との関連から考察し、部活動を継続している者の要因として「クラブへの所属」「友人の影響」「競技への魅力」等があることを報告している。マリンスポーツへの参与として久保ら(1997)はジュニアヨットクラブ所属者の場合、家族環境、環境整備の重要性をあげている。

活動の継続要因について川西ら(1993)は複数種目の一流競技者に調査を行い、同じセーリング種目であるヨットではヨット競技への愛着が高く、家族の励ましや理解が競技生活を支えており、女子は指導者の影響が強く、男子はチームメイトの存在が大きいとしている。海老原(1991, 1994)の一連の研究では、競技活動の継続要因はスポーツ種目により異なるとし、指導者、チームメイト、家族など他者的な継続要因の影響が大きいと述べている。また競技能力に恵まれることは活動を継続する上で重要な要因とされている。

これまでウインドサーフィンについて、その取り組みおよび活動を継続していくにあたってどの様な要因が影響しているかに関しては十分に解明されていない。ウインドサーフィン競技者への登竜門というべき学生ウインドサーフィン参加者の参加動機、活動継続の要因を知ることは、ウインド

サーフィンの普及にとって重要な要素であると思われる。また全日本学生ボードセーリング選手権大会に参加できる学生はサークル内および活動地域内の予選を勝ち抜いてきた者であり、学生ウインドサーファー全体の中では上位に属するものである。しかし、レース活動を主体とする全体的な上位者の中においても競技成績の違いによってウインドサーフィンへの参加動機、活動継続への要因は異なるのではないかと考えられた。

そこで本研究では、全日本学生ボードセーリング選手権大会参加者の特性を知り、競技成績(レース順位)による参加動機および活動継続に影響を及ぼす要因について明らかにすることを目的とした。

方法

2005年11月7日から11日に沖縄県国頭村で開催された「2005全日本学生ボードセーリング選手権大会(個人戦)」に出場した139名全員を対象に行った。所定の質問紙を受付時に手渡し法によって配布し、大会期間中に回収を行った。回収率は129部(93%)であり、そのうち本研究の分析サンプルは118件であった。

調査項目は個人的属性、活動状況、参加動機、活動に影響を及ぼす要因についてである。参加動機の質問項目は丹羽ら(1979)、山本(1990)、海老原(1994)らのスポーツ参加動機の質問項目を参考に尺度を構成した。マリンスポーツに関連しない項目を削除し、新たに関連すると思

表2. 活動状況 ①

項目	上位群		中位群		下位群		全体	
	N=39	(%)	N=39	(%)	N=40	(%)	N=118	(%)
練習頻度								
月3~5日	3	(7.69)	1	(2.56)	6	(15.)	10	(8.47)
月10日	24	(61.54)	26	(66.67)	28	(70.)	78	(66.1)
月20日	10	(25.64)	12	(30.77)	5	(12.5)	27	(22.88)
ほぼ毎日	2	(5.13)	0	(.)	1	(2.5)	3	(2.54)
費用								
10万円以下	2	(5.13)	2	(5.13)	6	(15.)	10	(8.47)
20万円以下	4	(10.26)	5	(12.82)	10	(25.)	19	(16.1)
30万円以下	5	(12.82)	8	(20.51)	9	(22.5)	22	(18.64)
50万円以下	21	(53.85)	19	(48.72)	12	(30.)	52	(44.07)
80万円以下	5	(12.82)	4	(10.26)	3	(7.5)	12	(10.17)
100万円以下	2	(5.13)	1	(2.56)	0	(.)	3	(2.54)

表3. 活動状況 ②

項目	上位群		中位群		下位群		全体	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
開始年齢	18.10	(1.1)	18.03	(1.2)	18.60	(1.37)	18.25	(1.25)
経験年数	3.21	(1.32)	2.64	(1.4)	2.25	(.78)	2.69	(1.25)**
練習時間	2.85	(1.04)	3.10	(1.9)	3.28	(1.32)	3.08	(1.46)
大会出場	8.05	(3.72)	7.46	(2.46)	6.73	(2.4)	7.41	(2.94)
合宿回数	3.21	(22.03)	3.05	(20.33)	2.43	(14.7)	2.89	(18.98)
合宿日数	22.03	(15.65)	20.33	(12.22)	14.70	(9.41)	18.98	(12.95)

** P<0.01

れる項目を加え、23項目の尺度を構成した。回答は5段階（5.あてはまる～1.あてはまらない）とした。活動継続要因については川西ら（1993）の競技活動を継続できた要因を参考とし、新たに3項目を加え12項目の尺度を構成した。回答は5段階（5.影響を受けた～1.影響を受けなかった）とした。競技成績に関しては競技会に参加した男性102名、女性37名を9レースの総合順位によって上位群、中位群、下位群の3グループに分けた。分析にはSPSS 12.0 for Windows 日本語版を用い、単純集計、クロス集計、因子分析、分散分析を行った。参加動機に関しては主因子法による因子分析（バリマックス回転）を行い、その結果抽出された因子について因子得点を算出し、グループごとに一要因分散分析を行った。次に参加動機23項目の平均値をグループごとに算出し、参加動機の重要度を順位づけし、因子構造との関係を検討した。活動継続要因12項目については一要因分散分析を行い、グループ間の平均値の差の検定にF検定を用いた。

結果および考察

1) 対象者の特性

本研究における回答者の属性を表1に示した。年齢は

19歳から27歳に分布しており、平均は20.94±1.13歳であった。全員が大学生であるため競技成績グループ間で特に差は見られなかったが、上位群の平均年齢が21.31±0.89歳と若干ではあるが高い。学年別ではやはり4年生が上位群の56.41%を占め、学年が下になるにしたがって上位群の割合が少ない。これについて χ^2 検定を行った結果、0.1%水準（ $\chi^2=26.55$ ）で有意差が認められ、競技成績は学年により異なることが明らかになった。

参加者のゲレンデ（活動地域）は関東地区が44.92%、関西地区が30.51%と多く、中部地区からの参加者は少なかった。また競技成績グループ別に見ると、関東・関西地区からの参加者が上位・中位群に占める割合は4割前後と大きな違いは見られない。一方、下位者の割合は関西地区が10%と少ないのに対し、九州・沖縄地区は37.5%と多く見られた。関西地区は下位者が少なく、競技レベルが高いと言える。これについても χ^2 検定を行った結果、1%水準（ $\chi^2=17.75$ ）で有意差が認められ、競技成績はゲレンデによって違いが見られることが明らかになった。性別、交通手段、所要時間においては競技成績との関連は見られなかった。交通手段として自家用車、電車を利用する者が多く、8割以上の者が1時間半以内でゲレンデに通える場所に居住していることがわかった。

表4. 参加動機に関する因子分析

項目	因子負荷量							
	1	2	3	4	5	6	7	8
“流行”								
テレビや雑誌、マスコミに刺激されて	0.836							
サーフィンブームの影響	0.815							
有名選手にあこがれて	0.498							
“効果”								
仲間作りのため		0.688						
とにかく何かしたかった		0.559						
先輩からすすめられたので		0.460						
体力の向上や健康を考えて		0.458						
サークルや部がおもしろそうだった		0.400						
“余暇”								
経済的な余裕があった			0.691					
うまくいけそうだった			0.610					
時間的な余裕があった			0.453					
“フィールド”								
マリンスポーツへのあこがれ				0.745				
海(自然)がすきだった				0.462				
“外見”								
実際に乗っているのを見て					0.800			
格好よく思えた				0.476	0.582			
“活動・競争”								
運動や体を動かすことがすき						0.726		
競争や勝つことがすき						0.514		
“挑戦”								
自分自身の強い欲求							0.696	
挑戦や冒険する気持ち							0.593	
“他者”								
友人がしていたりすすめられたので								0.839
家族がしていたりすすめられたので								0.413
固有値	2.125	1.566	1.516	1.337	1.185	1.137	1.103	1.073
寄与率	9.238	6.807	6.589	5.815	5.154	4.945	4.795	4.665
累積寄与率	9.238	16.044	22.634	28.449	33.603	38.548	43.343	48.008

注) 因子負荷量は0.4以上のものを記した

2) 活動状況

表2より、練習頻度はサークルごとに設定している練習日との兼ね合いもあり、上位群ほど多いとは言えないが、一ヶ月に10日が66%と最も多く、ほぼ毎週末が練習日になっており、週2日前後の頻度で練習しているものと思われる。次に一年間に課外活動にかかる個人的費用として艇庫代、遠征費や用具代等を含め、44%の者が年間に30万円から50万円の費用をかけており、均一の用具を使用しているとはいえ費用のかかるスポーツ種目と言える。

表3より、経験年数は平均2.69年、9年から1年に分布しており、4年以上経験している者は全体でわずか4名(3.4%)と少ない。開始年齢も平均18.25歳、12歳から26歳に分布しており18歳未満で開始している者はわずか3名(2.5%)であった。これらのことから大学に入学することを機にウインドサーフィンを始める者が多く、学生連盟の活動がウインドサーフィンとの出会いの場であると言える。このことから学生連盟の活動をさらに活発化し、ウインドサーフィンを体験する機会を増やすとともに愛好者の定着を計る。また大学入学前の就学期に

ウインドサーフィンを体験させることが開始時期の低年齢化につながり、今後のウインドサーフィンの普及の方策として考えられる。なお経験年数についてF検定を行った結果、0.1%水準(F=6.343)で有意差が認められ、当然ではあるが上位群ほど経験年数が多い。一方、年間の競技会への出場回数、合宿の回数、合宿を行う日数の平均は上位群が高く、下位群が低いのであるが、練習時間の平均は上位群になるにしたがって減少している。上位群には4年生、3年生などの高学年者が多く、就職活動や勉学に取り組みつつ、競技会や合宿などを効率的に利用し、技能レベルの向上に努めているものと思われる。

3) 参加動機の因子構造と因子の命名

どのような動機で大学生がウインドサーフィンを始めたかについて示すために、参加動機23項目に対する因子分析(主因子法、バリマックス回転)の結果、負荷量0.4以上の項目を21項目、固有値1.0以上の8因子を抽出した。これら8因子の累積寄与率は48%であった(表4)。第1因子に高い負荷量を示した項目は「テレビや雑誌、マスコミに刺激されて」「サーフィンプームの影響」など3項目で「流行」を示す因子と解釈した。第2因子に高い負荷量を示した項目は「仲間作りのため」「とにかく何かしたかった」など5項目で「効果」を示す因子と解釈した。第3因子に高い負荷量を示した項目は「経済的な余裕があった」「うまくなれそうだった」など3項目で「余暇」を示す因子と解釈した。第4因子は「マリンスポーツへのあこがれ」「海(自然)がすきだった」の2項目で「フィールド」を示す因子と解釈した。第5因子は「実際に乗っているのを見て」「格好よく思えた」の2

表5. 参加動機因子得点の競技成績比較

因子	競技成績			F 値
	上位群	中位群	下位群	
流行	-0.14	-0.10	0.24	2.17
効果	-0.38	0.03	0.34	8.20 ***
余暇	0.07	-0.04	-0.04	0.22
フィールド	0.01	-0.32	0.30	5.39 **
外見	-0.08	0.18	-0.10	1.28
活動・競争	0.12	-0.11	0.00	0.78
挑戦	-0.02	0.02	0.00	0.02
他者	-0.10	0.08	0.02	0.45

*** P<0.001 ** P<0.01

表6. 参加動機の平均値による順位づけ

順位	項目	全体		上位		中位		下位		F 値
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	運動や体を動かすことが好き	4.30	(1.08)	4.31	(1.15)	4.13	(1.22)	4.45	(.85)	0.88
2	挑戦や冒険する気持ち	4.21	(.78)	4.18	(.76)	4.13	(.89)	4.33	(.69)	0.67
3	サークルや部がおもしろそうだった	4.19	(1.12)	3.69	(1.38)	4.46	(.91)	4.40	(.84)	6.25 **
4	海(自然)がすきだった	4.08	(1.13)	4.05	(1.07)	3.87	(1.34)	4.30	(.94)	1.43
5	マリンスポーツへのあこがれ	3.84	(1.26)	3.82	(1.32)	3.46	(1.48)	4.23	(.8)	3.80 *
6	競争や勝つことが好き	3.75	(1.15)	4.21	(.89)	3.69	(1.22)	3.38	(1.17)	5.68 **
7	仲間作りのため	3.69	(1.17)	3.10	(1.37)	3.85	(.99)	4.13	(.88)	9.09 ***
8	実際に乗ってみて	3.64	(1.37)	3.44	(1.43)	3.97	(1.18)	3.53	(1.47)	1.75
9	とにかく何かしたかった	3.61	(1.35)	3.33	(1.53)	3.64	(1.31)	3.85	(1.17)	1.48
10	格好よく思えた	3.58	(1.32)	3.41	(1.33)	3.49	(1.35)	3.85	(1.27)	1.26
11	自分自身の強い欲求	3.56	(1.05)	3.62	(1.09)	3.56	(1.12)	3.50	(.96)	0.12
12	先輩からすすめられたので	3.19	(1.42)	2.87	(1.42)	3.28	(1.34)	3.40	(1.48)	1.51
13	体力の向上や健康を考えて	3.19	(1.38)	3.15	(1.37)	2.67	(1.46)	3.73	(1.11)	6.39 **
14	時間的な余裕があった	3.13	(1.36)	3.21	(1.24)	3.03	(1.42)	3.15	(1.42)	0.18
15	うまくなれそうだった	2.86	(1.26)	2.92	(1.42)	2.69	(1.26)	2.95	(1.11)	0.49
16	居住地域の近くに活動場があった	2.31	(1.62)	2.46	(1.76)	2.18	(1.55)	2.30	(1.57)	0.29
17	経済的な余裕があった	2.17	(1.22)	2.13	(1.15)	2.05	(1.23)	2.33	(1.29)	0.52
18	有名選手にあこがれて	1.71	(1.08)	1.72	(1.12)	1.64	(1.09)	1.78	(1.05)	0.15
19	友人がしていたりすすめられたので	1.50	(1.04)	1.31	(.86)	1.64	(1.11)	1.55	(1.13)	1.06
20	サーフィンプームの影響	1.47	(.98)	1.31	(.83)	1.28	(.72)	1.83	(1.22)	4.12 *
21	テレビや雑誌、マスコミに刺激されて	1.37	(.89)	1.26	(.85)	1.31	(.8)	1.55	(1.01)	1.22
22	家族がしていたりすすめられたので	1.36	(.87)	1.26	(.85)	1.51	(1.07)	1.30	(.65)	0.97
23	体育授業などでやってみて	1.25	(.73)	1.21	(.8)	1.15	(.49)	1.40	(.84)	1.26

*** P<0.001 ** P<0.01 * P<0.05

項目で“外見”を示す因子と解釈した。第6因子は「運動や体を動かすことがすき」「競争や勝つことがすき」の2項目で“活動・競争”を示す因子と解釈した。第7因子は「自分自身の強い欲求」「挑戦や冒険する気持ち」の2項目で“挑戦”を示す因子と解釈した。第8因子は「友人がしていたり、すすめられたので」「家族がしていたり、すすめられたので」の2項目で“他者”を示す因子と解釈した。「体育の授業などでやってみて」「居住地の近くに活動場があった」の2項目はいずれの因子にも関与せず、因子負荷量も低かったためリストから除外した。

4) 参加動機因子と競技成績

競技成績と参加動機因子との関係を見るために競技成績グループ別に因子得点の平均値を算出し、表5に示した。分散分析で有意差の見られた因子は、第2因子である“効果”に0.1%水準で有意差が見られ、第4因子である“フィールド”に1%水準で有意差が認められた。効果因子では下位群の値が最も高く、中位群、上位群と低くなる。フィールド因子でも下位群の値が最も高く、上位群、中位群と低い値を示している。下位群は仲間作りや健康、部がおもしろそうだったなど2次的な効果を動機としている。またマリンスポーツのイメージや海というフィールドを求めてウインドサーフィンに参加していることがわかる。今回、学生選手権に出場した学生は全員競技主体のサークルで活動を行っており、主に技術力の向上や上位入賞を目指して練習等を行っている。しかし下位群にはサークル内の雰囲気や海やマリンスポーツへの興味からウインドサーフィンに参加する者が多く、すでに参加する動機の段階で目指すものや目的意識の違いが見られた。競技主体のサークルにおいても、これらのことを考慮して活動を行うことで部員の定着率の向上、活動の活発化につながるものと推測される。

5) 参加動機の順位づけ

参加動機23項目を平均値によって順位付けを行い、表6に示した。

“活動・競争”の2項目、「運動や体を動かすことがすき(1位)」「競争や勝つことがすき(6位)」、「フィールド」の2項目、「マリンスポーツへのあこがれ(4位)」「海(自然)がすきだった(5位)」は因子内の項目すべてが上位に順位付けされている。項目では“挑戦”の「挑戦や冒険する気持ち(2位)」、「効果」の「サークルや部がおもしろそうだった(3位)」「仲間作りのため(7位)」などが上位に順位づけされている。これらの因子および項目は重要な参加動機である。

“流行”の3項目「有名選手にあこがれて(18位)」「サーフィンブームの影響(20位)」「テレビや雑誌、マスコミに刺激されて(21位)」、「余暇」の3項目、「時間的余裕があった(14位)」「うまくなれそうだった(15位)」「経済的な余裕があった(17位)」「他者」の2項目、「友人がしていたり、すすめられたので(19位)」「家族がしていたり、すすめられたので(22位)」はすべて下位に順位付けがなされており、これらの因子項目は参加動機として重要でないと言える。これまでの他の種目における先行研究では重要な参加動機として親や家族、友人、指導者などの重要な他者の影響をあげられている。また同じセーリング競技であるヨットや水上で行う個人種目であるボートを対象にした川西ら(1993)の一流選手を対象とした報告においても、先輩などの重要な他者の存在の重要性が述べられている。しかし学生ウインドサーファーの場合、重要な他者の影響はあまり受けていないと考えられる。

参加動機項目と競技成績の比較ではF検定を用い、「仲間作りのため」において0.1%水準で有意差が見られ、「サークルや部がおもしろそうだった」「競争や勝つことがすき」「体力の向上や健康を考えて」では1%水準で有意差が見られた。“活動・競争”因子に属する「競争

表7. 活動継続要因

項目	上位群		中位群		下位群		全体		F値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
先輩や仲間から恵まれた	4.51	(.79)	4.72	(.46)	4.55	(.81)	4.59	(.71)	0.93
家族の理解や励ましがあつた	3.38	(1.35)	3.82	(1.14)	3.45	(1.11)	3.55	(1.21)	1.49
友人の理解や励ましがあつた	3.10	(1.43)	3.38	(1.25)	3.75	(1.03)	3.42	(1.26)	2.69
指導者に恵まれた	2.85	(1.53)	2.46	(1.47)	2.60	(1.37)	2.64	(1.45)	0.70
目標や目指すものがあつた	4.36	(.67)	3.79	(1.22)	3.98	(1.03)	4.04	(1.02)	3.26 *
競技に対する強い愛着があつた	4.13	(.86)	3.90	(1.05)	3.83	(1.13)	3.95	(1.02)	0.95
自分の意志の強さ	3.97	(1.01)	3.46	(1.21)	3.35	(1.11)	3.65	(1.13)	2.46
競技能力に恵まれていた	3.51	(1.1)	2.79	(1.28)	2.53	(1.24)	2.94	(1.27)	7.02 **
体格に恵まれていた	2.41	(1.29)	2.64	(1.25)	2.40	(1.15)	2.48	(1.22)	0.48
海の施設や環境に恵まれていた	3.56	(1.39)	3.85	(1.23)	3.90	(1.01)	3.77	(1.22)	0.86
学校生活の環境に恵まれていた	3.03	(1.46)	2.85	(1.55)	3.23	(1.33)	3.03	(1.44)	0.68
経済的な援助が得られた	3.23	(1.46)	2.77	(1.46)	2.78	(1.4)	2.92	(1.45)	1.32

** P<0.01 * P<0.05

や勝つことがすき」は下位群の3.38に対し、上位群は4.21と競技成績グループが上位になるにしたがって、この要因の影響は強い。また“効果”因子に属する「仲間作りのため」「サークルや部がおもしろそうだった」では下位・中位群と上位群に、「体力の向上や健康を考えて」は下位群と中位・上位群の平均値にかなりの差が見られる。参加動機項目の順位づけおよび競技成績との比較から身体運動や競技スポーツとしてのウインドサーフィンをアピールしていくことが重要であり、大会での上位入賞や競技力向上を目的とするサークル団体の場合、特に有効であると思われる。

6) 活動継続要因と競技成績

これまでのウインドサーフィン活動の継続と競技成績についてまとめたものが表7である。F検定を行った結果、「競技能力に恵まれていた」に1%水準で有意差が見られた。上位群では3.51、下位群では2.53と差が見られた。特に上位の者にとって競技能力に秀でていることがその後の活動の継続に影響していることがわかる。最も高い値を示したのは「先輩や仲間に恵まれた」の4.59であり、あまり影響のなかった要因では「体格に恵まれていた」2.64、「指導者に恵まれた」が2.48である。個人競技ではあるが海上で帆走を比較しながら練習を行うため、ともに活動をするプレーヤーの存在が活動を継続する上で重要であると思われる。また統一された用具の規格内で行われる学生の大会では、用具が限定されており、コンディションによって有利な体格は異なる。そのため、体格と活動継続及び競技成績との関連性は少ないものと考えられる。一方、今回の大会に参加したウインドサーフィン部において指導者やコーチが正式に配置されている団体はわずか2校であり、非常に少ない。多くの場合、先輩（上級生）が交代で指導を行っており、先輩の存在が活動の継続に強く影響を及ぼし、指導者からの影響は希薄になっているものと思われる。ただ海上という危険をとまなうフィールドであるため、指導者の設置は競技力の向上だけでなく安全面への配慮からも早急な対策が必要である。

有意な差は見られなかったが全体として「目標や目指すもの」や「競技に対する強い愛着」など自的的な要因が活動継続に影響を及ぼしている。環境的な要因では「海の施設や環境に恵まれていた」が高い値を示した。また参加動機と同様に家族、友人などの他者的な要因の影響は弱い。これは風に左右される練習時間と練習内容、安全面などから家族や友人の理解や励ましが得られにくいのではないかと考えられる。

7) 今後の課題

本研究では参加動機および継続要因を変化のない特性

的なものにとらえている。しかしながら参加動機、特に継続要因が時間とともに、プレイをしていくとともに変化する状態的なものとするならば対象者を継続的に追跡する必要がある。つまり競技成績が低いからこそ、参加動機や継続要因において競技性のないものを重要としている。または重要と考え、参加したと思うようになるとも考えられる。その場合、本研究とはまったく異なる概念となる。また因子分析において抽出された8因子で全分散の48%しか説明できていないため、本研究で用いた質問項目については今後さらに検討を要するであろう。調査項目を再検討し、参加動機や継続要因について入部時から学年を追って継続して調査した場合と因子構造や変容を比較するなど検討の余地があることを指摘する。

結 論

本研究では学生ウインドサーファーの競技成績による比較を通じて、参加動機および活動継続に影響を及ぼす要因の差異について検討を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

(1) 97.5%の者が大学からウインドサーフィンを始めており、大学における課外活動がウインドサーフィンを開始するきっかけとなっている。

(2) ウインドサーフィンへの参加動機を構成していると思われる8因子を抽出し、“流行”“効果”“余暇”“フィールド”“外見”“活動・競争”“挑戦”“他者”と命名した。

(3) 参加動機と競技成績との検討では“効果”に0.1%水準で、“フィールド”に1%水準で有意な差が認められた。

(4) 参加動機に重要な他者の影響はあまり見られないが、活動を継続していく上で上級生や仲間に恵まれることは重要である。

(5) 活動の継続と競技成績について「競技能力に恵まれていた」に1%水準で有意差が見られた。

競技成績と参加動機および継続要因の関係を見てきたわけだが、相対的に見て、参加動機および継続要因は競技成績に何らかの影響を及ぼしていると考えられる。ウインドサーフィンはレジャー活動としての人気も高いが、本研究では身体運動や競技スポーツとしてのウインドサーフィンをアピールすることが競技能力の高い者の参加につながるが示された。また活動の継続には自己の内発的な要因が主に影響を及ぼしているが、上級生や仲間の存在は重要であり、指導者の配置も急務である。さらに調査項目を再検討し、参加動機や活動継続要因について継続調査した場合と因子構造の違いや変容を検討することも今後の課題である。

注) パテントや商標の関係により「ボードセーリング」という用語が以前は使用されていたが、1995年後半より

団体名称や製品名が「ウインドサーフィン」を使用したものに変更され、一般化している。そのため、ここではあえて「ウインドサーフィン」という語を使用する。

引用文献

Gill.D., Gross, J. & Huddleston, S. (1983) Participation motivation in youth sport. *International Journal of Sport Psychology*, 14, pp1-14.

Wankel, L. & Kreisel, P. (1985) Factor underlying enjoyment of youth sport : Sport and age group comparison. *Journal of Sport Psychology*. 7. pp 51-84.

久保和之, 守能信次, 谷 健二, 川西正志 (1997) マリンスポーツへ参与する環境—特にヨット選手の活動開始時に着目して—, 日本体育学会第48回大会体育社会学専門分科会発表論文集. pp149-154.

平松利文, 永戸節子, 岡崎宏一, 吉岡清香 (1987) 達成動機と継続意識の研究, 日本体育学会第38回大会号, p133.

川西正志 (1993) 一流スポーツ選手のキャリアパターンとスポーツ環境に関する社会学的研究, 平成5年度教育研究学内特別経費報告書.

海老原修 (1991) スポーツ社会化における成果と課題, 体育・スポーツ社会学研究10, pp153-171.

海老原修 (1994) スポーツキャリアから来る運動部離れのメカニズム, 文部科学省科学研究費 (一般研究C) 研究結果報告書.

丹羽劭昭, 村松洋子 (1979) 女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究, 体育学研究, 第24巻第1号, pp25-38.

山本教人 (1990) 大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較, 体育学研究第35巻, pp109-119.

— ウインドサーフィンへの参加継続意欲について —

本調査は学生ウインドサーファーの実情を明らかにし、今後の発展を考えるためのものです。ご面倒とは思いますが、ウインドサーフィンの明るい未来のために何卒ご協力ください（10分程度でできると思います）。

調査者：沖縄県 名桜大学講師 平野貴也

学校名（ 大学 ） 学年（ ） 氏名（ ）

※大会成績とデータを比較したいので必ずご記入ください。外部に漏らしたり悪用は決していたしません。

次の各設問にお答えください。番号には○を、空欄には回答をお書きください。

Q 1 : 性別は？ ①男性 ②女性 Q 2 : 主なグレンデ（ ） 県 海岸

Q 3 : 年齢は（ ） 歳 Q 4 : ウインドの開始年齢は（ ） 歳

Q 5 : 過去に部活動やスポーツクラブなどでスポーツは行っていましたか？種目をお書きください。
高等学校（ ） 中学校（ ） 小学校（ ） それ以前（ ）

Q 6 : 居住地からグレンデまでの主な交通手段はどれですか。また所要時間はどれくらいかかりますか？
所 要 時 間 : ① 30 分以内 ② 1 時間以内 ③ 1 時間半以内 ④ 2 時間以内 ⑤ 2 時間以上
主 な 交 通 手 段 : ① 自 家 用 車 ② 他 者 車 ③ バス ④ 電 車 ⑤ バイク・自 転 車 ⑥ 徒 歩 ⑦ その他

Q 7 : 平均すると一日、何時間くらいセーリングしますか？（約 時間）

Q 8 : 平均すると月にどれくらいの頻度でセーリングしますか？
① 月 3 ～ 5 日（週 1 日程度） ② 月 10 日（週 2 ～ 3 日程度） ③ 月 20 日（週 4 ～ 5 日程度） ④ ほぼ毎日

Q 9 : 部単独もしくは合同で合宿を年間にどれくらい行いますか？ 年（ ） 回 トータル（ ）

Q 10 : 一年間でどれくらいウインドサーフィンの大会に参加しますか？（ ） 回

Q 11 : 年にウインドサーフィンにどのくらいお金を使いますか？（艇庫代、交通費、遠征費等も含めて）
① 10 万円以下 ② 20 万円以下 ③ 30 万円以下 ④ 50 万円以下 ⑤ 80 万円以下
⑥ 100 万円以下 ⑦ それ以上（約 万円）

Q 12 : 部費は月にいくら集めていますか？ 月（ ） 円

Q 13 : 学校や学友会、OB会などから金銭的補助はありますか？ およその金額をお書きください。
① 部に対してある 年（ ） 円 ② 個人的にある 年（ ） 円 ③ ない

Q 14 : 海上もしくは陸上で実際に指導してくれる指導者はいますか（複数可）？
① 顧問 ② 監督 ③ コーチ ④ その他（ ） ⑤ いない

Q 15 : 部としてレスキューや指導に使用できる船やジェットはありますか？ ① ある ② ない

Q 16 : 現在の部員数は何名ですか？また入部したときの同期は何名いて、現在は何名になりました？
部員数は（ ） 同期は（ ） 名から（ ） 名へ

Q 17 : ウインドの活動を続ける上で最も重要視していることに1つ○をつけてください。
① 勝利を追求すること ② 健康のため ③ 技術を向上すること ④ 仲間との交流
⑤ ウインドを楽しむこと ⑥ 人間形成 ⑦ 海と親しむ ⑧ その他（ ）

Q 18 : ウインドサーフィンをしていて最も感じることに1つ○をしてください。

- ①スピード感 ②解放感・自由感 ③孤独感 ④難しさ ⑤充足感 ⑥操作感 ⑦爽快感
⑧自然との一体感 ⑨陶酔感・かっこよさ ⑩厳しさ ⑪手軽さ ⑫その他 ()

Q 19 : ウインドを始めるにあたって影響を受けた程度について指標にそって番号に○をつけてください。

5	4	3	2	1
影響が あった	やや影響が あった	どちらとも 言えない	あまり影響 がなかった	影響が なかった

- | | | | |
|----------------|-----------|---------------------|-----------|
| ・運動や体を動かすことがすき | 5-4-3-2-1 | ・サークルや部がおもしろそうだった | 5-4-3-2-1 |
| ・海(自然)がすきだった | 5-4-3-2-1 | ・マリンスポーツへのあこがれ | 5-4-3-2-1 |
| ・競争や勝つことがすき | 5-4-3-2-1 | ・体力の向上や健康を考えて | 5-4-3-2-1 |
| ・挑戦や冒険する気持ち | 5-4-3-2-1 | ・家族がしていたりすすめられたので | 5-4-3-2-1 |
| ・自分自身の強い欲求 | 5-4-3-2-1 | ・友人がしていたりすすめられたので | 5-4-3-2-1 |
| ・経済的な余裕があった | 5-4-3-2-1 | ・格好よく思えた | 5-4-3-2-1 |
| ・時間的な余裕があった | 5-4-3-2-1 | ・先輩からすすめられたので | 5-4-3-2-1 |
| ・仲間作りのため | 5-4-3-2-1 | ・体育の授業などでやってみて | 5-4-3-2-1 |
| ・実際に乗っているのを見て | 5-4-3-2-1 | ・テレビや雑誌, マスコミに刺激されて | 5-4-3-2-1 |
| ・とにかく何かしたかった | 5-4-3-2-1 | ・サーフィンプームの影響 | 5-4-3-2-1 |
| ・うまくなれそうだった | 5-4-3-2-1 | ・居住地域の近くに活動場があった | 5-4-3-2-1 |
| ・有名選手にあこがれて | 5-4-3-2-1 | | |

Q 20 : ウインドをこれまで続けてこられた要因はなんだと思いますか? Q19の指標にそってお答えください。

- | | | | |
|--------------|-----------|-----------------|-----------|
| ・指導者に恵まれた | 5-4-3-2-1 | ・学校生活の環境に恵まれていた | 5-4-3-2-1 |
| ・先輩や仲間にも恵まれた | 5-4-3-2-1 | ・海の施設や環境に恵まれていた | 5-4-3-2-1 |
| ・競技能力に恵まれていた | 5-4-3-2-1 | ・家族の理解や励ましがあつた | 5-4-3-2-1 |
| ・体格に恵まれていた | 5-4-3-2-1 | ・友人の理解や励ましがあつた | 5-4-3-2-1 |
| ・自分の意志の強さ | 5-4-3-2-1 | ・競技に対する強い愛着があつた | 5-4-3-2-1 |
| ・経済的な援助が得られた | 5-4-3-2-1 | ・目標や目指すものがあつた | 5-4-3-2-1 |

Q 21 : 現在の部活動は充実していますか? ①充実 ②やや充実 ③普通 ④やや不満 ⑤不満

Q 22 : ウインドを辞めようと思ったことはありますか? 最も影響した理由に1つ○をしてください。

- ①ない ②経済的に困難 ③学業との両立 ④人間関係 ⑤遊べない ⑥うまくなならない
⑦疲れる ⑧練習内容が不満 ⑨指導が得られない ⑩何となく ⑪その他 ()

Q 23 : 大学卒業後はウインドサーフィンを続けると思いますか?

ボードは: ①ロングボードを ②ロングボード以外を ③ロングもその他も

どの様に: ①レースを続ける ②楽しみとして続ける ③環境が整えば続ける ④続けない ⑤わからない

Q 24 : ウインドサーフィン活性化のために, どの程度必要だと思えますか? 下の尺度にそってお答えください

強く思う --- やや思う --- 普通 --- あまり思わない --- 思わない

5 ----- 4 ----- 3 ----- 2 ----- 1

- ①指導法の確立・改善 () ②初心者用用具の普及・開発 () ③ゲレンデの改善 ()
④用具や団体の統一 () ⑤学校教育・部活動への導入 () ⑥安全性の向上 ()
⑦資格制度の確立 () ⑧子供達への体験活動 () ⑨世界大会の誘致 ()
⑩スターの育成 () ⑪用具のスモール化・軽量化 () ⑫価格の軽減 ()

ありがとうございました